

新潟中央短期大学

暁星論叢

第57号 抜刷

(平成19年6月)

欲求不満場面における感情理解と感情表出

— 絵画欲求不満テストに表情写真を用いて —

佐々木 宏 之

欲求不満場面における感情理解と感情表出

— 絵画欲求不満テストに表情写真を用いて —

佐々木 宏 之

はじめに

表情は、他者の感情状態を理解し、他者に自分の感情を伝えるための重要な手段である。特に言語を習熟していない乳幼児にとっては最大のコミュニケーションツールであり、流暢に言葉を操る大人にしても微妙な感情のニュアンスを伝えるときなどに表情の果たす役割は大きい。また逆に、表情は本心を悟らせないようカモフラージュする際にも利用される。親密な人間関係の維持を図って不満を笑顔で押し隠すのはその一例である。日本では感情を露わにしないことが美德とされ、例えば、賞賛に対するはにかみの笑みは嫌味のない好ましい性格を印象づけるのに役立つたりする。対してアメリカでは、贈り物をもらったときには表情で喜びを表現することが期待される。

このように、場面に応じて適切に感情を表出する慣習は表示規則と呼ばれる (*display rules*; Ekman & Friesen, 1969)。表示規則を十分認識していれば、他者の表情を見たときに、他者がおかれた背景文脈と照らし合わせて、表情に隠された本当の心情も推測できる。こうした判断に利用される規範を解読規則といい (*decoding rules*; Matsumoto & Ekman, 1989)、表示規則とは表裏一体の関係にある。表示規則や解読規則に関する研究には、先に例示したような文化差に着目したものと (Matsumoto & Ekman, 1989; Matsumoto et al., 1998)、発達心理の観点から児童期における表示規則の獲得を取り上げたものなどがある (Saarni, 1979; 1984)。詳細については中村 (1993) の総説を参照されたい。

感情理解の個人差

表情による感情理解はもっぱら文化的差異との関連から検討され、個人差を扱った研究は見られない。確かに、表示規則や解読規則は社会・文化における暗黙のルールであるから、個人の性格特性よりも文化的差異に注目が集まるのは当然であろう。一方、表情研究の分野で不安傾向などの個人差が認められるのは、表情刺激に対する無意図的な反応においてであり、不安傾向の高い被験者が恐れや怒りの表情写真に対して意図せず注意を向けてしまうことが知られている (Bradley et al., 2000; Fox, 2002)。この場合の個人差は、表情を見たときに自動的に作用する脳の働き (扁桃体と呼ばれる表情認知を司る脳の活動) に現れるものであり (William et al., 2005)、解読規則の下で「背景文脈と表情を照ら

し合わせて感情状態を推測する」というような高度な推論過程とは異なる点に注意しなければならない。

それでは、背景文脈に伴う表情理解に個人差が生じることはないのでしょうか。本研究では、P-Fスタディ日本語版（住田ら，1987）の分析手法を表情による感情理解の分析に応用し、感情理解の個人差を検討した。P-Fスタディは投影法の心理テストの一つで、対人的な欲求不満場面を描写した24の漫画絵から構成される（図1）。被験者はセリフの噴出しに入る発話内容を想像し、その反応内容の分析から攻撃的性格特性と問題解決スキルが診断される。個々の反応は、発話内容に含まれる攻撃性の「方向」と「型」に基づいて分類され、2つの分類次元（各3水準）の組み合わせによる計9つのカテゴリーに当てはめられる。

今回の実験にはP-Fスタディの図版の代わりに怒り、笑い、悲しみの表情写真を用いた。欲求不満場面には、不可抗力で遅刻した状況を想定した。また、分析では分類カテゴリーを3つに単純化している（詳細は後述）。もともとP-Fスタディ図版の人物画には顔が描かれていないのだが、それは投影法の心理テストの目的が、曖昧な刺激の解釈に現れる個人の傾性の分析にあるためで、たとえ無表情に描かれたとしてもその顔が反応を限定する要因になってしまうからである。よって本研究のように顔写真を提示した場合、発話内容に個人差が生じず、一様な反応になる可能性があるだろう。その一方で、我々は本心と異なる表情が表出されることも知っているのだから、表情の読み取りには性格特性を反映した多様性が見られるかもしれない。そこで実験では、表情写真の人物の発話内容を尋ねるとともに、その人物に対してどのような態度をとるかを尋ね、そこに現れる感情理解と感情表出を分析した。また、前述したように表情認知の個人差については不安傾向との関連を検討されることが多いため（Bradley et al., 2000；Fox, 2002；Richards et al., 2002）、欲求不満場面における表情理解にも不安傾向が影響すると予想し、特性不安尺度を用いて被験者の不安傾向を調べた。

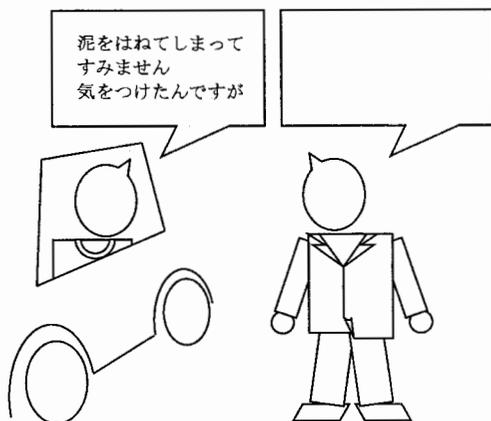


図1 P-Fスタディ図版を参考に作成



図2 怒り、笑み、悲しみの表情刺激

方法

被験者

新潟中央短期大学の学生174名と暁星学園看護科の学生35名が調査に参加した。回答者の性別は男性17名、女性192名だった。

手続き

怒り、笑み、悲しみの表情を示す男性の顔写真がA 3用紙の左側に並べて提示された(図2)。顔写真は直径4センチの円形内に頭部のみが見えるよう切り出されている。それぞれの顔写真についてイメージするよう指示される欲求不満場面は、「コンサートに行くために友人と待ち合わせをしていたのだが、電車が事故で遅れて待ち合わせ時間に遅刻してしまった」という状況である。被験者の第一の課題は、遅刻理由を聞いた“友人”が写真のような表情を示しながらどのように発言したか記入することだった。続いて第二の課題では、後日今度はその友人が電車の事故で遅刻したときに“自分”がどのように発言するかを記入した。これら2つの課題をそれぞれの顔写真に対して順に行うよう求められた。各表情の並び順は被験者間でカウンターバランスがとられた。

用紙の右半分にはS T A I日本語版(清水・今栄, 2001)の特性不安尺度が提示された。特性不安尺度は、「憂うつである」「ささいなことに思いわずらう」など、普段の心の状態を表現した20の項目から構成されている。各項目について「全くそうでない」「いくぶんそうである」「ほぼそうである」「全くそうである」のうちもっともあてはまるものを選んで回答した。この尺度の α 係数は.85で、再テストの信頼性係数は.80に保たれたことが示されている。被験者は先の発言記入課題に続けて、特性不安尺度に回答するよう求められた。

結果

209名のうち、記入洩れのある回答、不真面目な回答、課題を理解していない回答を除

外し、191名の回答から分析を行った。191名の特性不安尺度の α 係数は.83であった。

表1 各表情における発話内容の分類

(N = 191)

表情	話者	分類		
		他責	無責	共感
怒り	友人	97.9	1.0	1.0
	自分	66.5	27.7	5.8
笑顔	友人	2.6	78.0	19.4
	自分	3.1	68.1	28.8
悲しみ	友人	53.9	13.1	33.0
	自分	20.9	42.9	36.1

注: 数値の単位はパーセント。合計が100にならないのは小数第2位を省略しているため。

発話内容の分類

本来P-Fスタディでは、発話内容を攻撃性の「方向」と「型」から分類する。攻撃性の方向は他責(他者や事物に向ける)、自責(自分自身に向ける)、無責(どこにも向けない)の3水準で、反応の型は障害優位(障害そのものに注目)、自我防衛(結果責任に注目)、要求固執(欲求不満の解決に注目)の3水準に分けられる。そして、これらの組み合わせによる計9つの下位分類に被験者の反応を当てはめるのが通常分析法に則った分類である。しかし、本実験の欲求不満場面は、遅刻した本人が加害者であると同時に電車事故の被害者にもなるため、同情を寄せる発言など本来の分類に当てはまらない反応が数多く見られた。また、その他の反応にも偏りが見られることから、発話内容を他責、無責、共感の3つのカテゴリーに分類することにした。他責はP-Fスタディでいう他責逡巡反応または他罰反応で、「参ったな」「遅いよ」など、障害を強調したり相手を攻撃したりして不満を露わにする言動である。無責はP-Fスタディの無責逡巡反応または無罰反応に相当し、「大丈夫だよ」「仕方ない」のように障害を軽視したり相手を許したりする言動である。共感とはP-Fスタディにはない分類で、「大丈夫だった?」「大変だったね」など、相手への心配や共感を示す言動である。

表1は各表情における発話内容を分類した結果である。怒りの表情では友人、自分ともに他責反応が多く、自分の発話内容には無責反応も見られた。笑みの表情では他責反応はほとんど見られず無責反応が多い。また友人、自分のいずれにも共感反応が見られた。悲しみの表情では、友人の発話内容は他責反応が多く無責反応は少ない。対照的に自分の発話内容は無責反応が多く見られ、他責反応は少なかった。以上のように、表情によって発話内容が大きく異なることがわかった。

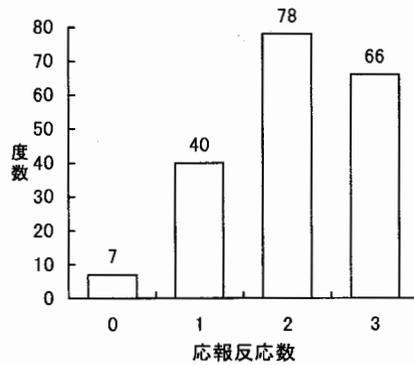


図3 応報反応の出現頻度

次に、感情理解が感情表出に及ぼす影響を検討するために、友人の発話内容と自分の発話内容の一致度について検討する。友人の発話内容に合わせて同分類の反応をするときの自分の発話内容を応報反応とした（例えば、友人の他責反応に対して自分も他責反応をしたとき）。図3が示すように大半の被験者（77%）が2つ以上の表情において応報反応を行っている。

不安傾向との関連

191名の被験者のうち、特性不安尺度得点の下位80名を特性不安低群とし、上位79名を特性不安高群とした。低群の尺度得点の平均は42.8（範囲23～49）で、高群の平均は60.01（範囲54～73）だった。各表情における友人と自分の発話内容について、反応の内訳を二群間で比較すると、いずれの条件においても二群間に有意な差は認められなかった（ $\chi^2(2) < 3.3, p > .1$ ）。次に、応報反応について二群間の比較を行う。表2は友人の他責反応、無責反応、共感反応に対する応報反応の割合を高群低群ごとに算出したものである。カイ二乗検定の結果、他責反応に対する応報反応は低群より高群の方が有意に少ないことがわかった（ $\chi^2(1) = 3.89, p < .05$ ）。

表2 応報反応における不安特性

反応分類	低群 (N = 80)		高群 (N = 79)	
	応報 / 全体	%	応報 / 全体	%
他責	77 / 121	63.6	64 / 125	51.2
無責	57 / 73	78.1	64 / 73	87.7
共感	35 / 46	76.1	33 / 39	84.6
計	169 / 240	70.4	161 / 237	67.9

考察

本研究の目的は欲求不満場面における感情理解の個人差を調べることであった。実験では、表情写真の人物の発話とそれに対する自分の発話を記述させ、その発話内容についてP-Fスタディを模した分類手法から感情理解と感情表出の個人差を測定した。その結果、怒りと笑みの表情に対する感情理解は被験者間の一致が見られたが、悲しみの表情に対する感情理解にはばらつきが生じた。同様に、怒りと笑みの表情を示した人物に対する感情表出にも被験者間の一致が見られ、悲しみの表情を示した人物に対しては感情表出のばらつきが生じた。すなわち、他者の怒りの表情からは不満を強く表す他責反応を、笑みの表情からは寛容な態度を示す無責反応を読み取り、その人物に対する自身の発話も、怒りの表情には他責反応、笑みの表情には無責反応を多く示した。したがって、怒りと笑みの表情に対する感情理解には、表示規則や解読規則と同様の固定化した図式があるといえる。一方、悲しみの表情理解は曖昧さを含み、直接間接に不満を表す反応の他に、不満を抑えつつ相手を心配する反応も現れた。これに対する自身の感情表出は、感情理解とは対照的に他責反応がもっとも少なくなり、寛容な態度や共感的な態度を示す割合が多くなった。この悲しみの表情に見られる個人差はどのように説明できるだろうか。ここでは表情の認知心理学的研究と対人認知の社会心理学的研究を参照しながら考察を試みる。

表情の識別のしやすさに関する研究によれば、幸福以外の表情では視認度に違いはないとされているが(桐田, 1993)、無表情の顔が表情顔に変化するアニメーションを使った実験では、提示時間が1秒以下になると悲しみの表情の識別性は著しく低下することが確かめられている(Kamachi et al., 2001)。また、悲しみ顔の画像にぼかしを入れた場合でも、その弁別感度は大きく損なわれてしまう(Endo et al., 1995)。つまり、悲しみの表情認知は低時間解像・高空間解像のいわゆる持続型の応答特性をもち、悲しみの表情の同定には時間をかけた精査が必要だということが示唆される。もちろん、表情認知と表情からの感情の推測を同列には語れないとはいえ、悲しみの表情の識別に認知的な努力(cognitive effort)を要することは、悲しみの表情理解に曖昧さが生じる要因にもなっていると思われる。

もう一つの説明は責任帰属の理論を踏まえた考察である。責任帰属とは、何らかの被害を受けたときに、加害者の行為の原因を推測する過程を指す。責任帰属のモデルによれば、加害行為は意図性、正当性、制御可能性により分類される(大淵, 1993)。この分類に当てはめると、本実験の事故による遅刻は非意図的で制御不能な加害行為である。したがって、(冷静な責任判断をせずに)他責反応を示した友人に対しては、感情にまかせた無思慮な態度を汲み取っていることが推察できるであろう。また、無責反応には意図性、制御可能性を考慮した寛容な態度を、共感反応には責任の所在に注目しない温情的な態度を、表情

から汲み取っていることになるであろう。さて、そこで悲しみ表情に対する反応のばらつきについてだが、友人の発話内容で他責反応と共感反応が大半を占めているという結果は、いずれにしろ“友人は責任の所在について客観的な判断をしていない”と捉えたことを意味する。つまり悲しみの表情における反応の曖昧さは、責任帰属に関する意識の低さを、自分本位の態度として表すか（他責反応）、あるいは共感的・他者依存的な態度として表すか（共感反応）の個人差を映し出しているのかもしれない。

感情理解と感情表出の関係については、総じて相手の態度に応じた感情表出をすることが多く、「囚人のジレンマ」ゲームに見られる応報戦略（山岸，1990）の形が採られた。ただし本研究では、各被験者が3つの表情すべてについて反応する被験者内要因の実験手続きを採用したため、各表情に対する反応の独立性の低さが応報的な方略への偏向を招いたのかもしれない。そうした可能性にもかかわらず、応報戦略を採用するか否かの判断には不安傾向特性の影響が見られ、不満を露わにした友人への態度に不安傾向による個人差が見出された。不安傾向の高群は低群に比べて他責反応の返報性が少なく、応報的な方略選択を採って対人不安を自ら煽るよりも、不満を押し隠すことで円満な人間関係を維持しようとする性格特性が現れたといえるであろう。

結語

本研究では、悲しみ顔の感情理解に個人差が生じることを確認した。第三者的な立場から欲求不満場面を解釈させることで、そこに投影される攻撃性を探るP-Fスタディと違い、実験の欲求不満場面では当事者として関わるため、潜在的な攻撃性を表面化する試みとはならなかった。しかし、悲しみ顔の解釈に見られた曖昧さは、悲しみの表情が投影法的な研究手法に利用し得ることを示唆している。残念ながら、今回着目した不安特性は、悲しみ顔における曖昧さとの間に関係性が見出されなかったが、今後の研究においては不安傾向以外の性格特性との関連からも検討することが必要であろう。

謝辞

この論文は新潟中央短期大学平成17年度卒業論文において発表された丸山雄基氏（現黒条保育園保育士）との共同研究をもとに作成された。本研究は同氏との議論を通して着想を得たものであり、本来ならば共同執筆者として名を連ねるべき共同研究者である。同氏の本研究への貢献に対し、ここに記して深謝する。

引用文献

- Bradley, B. P., Mogg, K., & Millar, N. H. (2000) Covert and overt orienting of attention to emotional faces in anxiety. *Cognition and Emotion*, 14, 789–808.
- Ekman, P. & Friesen, W. (1969) The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1, 49–98.
- Endo, M., Kirita, T., & Abe, T. (1995) The effects of image blurring on the recognition of facial expressions. *Tohoku Psychologica Folia*, 54, 68–82.
- Fox, E. (2002) Processing emotional facial expressions: The role of anxiety and awareness. *Cognitive, Affective, & Behavioral Neuroscience*, 2, 52–63.
- Kamachi, M., Bruce, V., Mukaida, S., Gyoba, J., Yoshikawa, S., & Akamatsu, S. (2001) Dynamic properties influence the perception of facial expressions. *Perception*, 30, 875–887.
- 桐田隆博 (1993) 表情を理解する 吉川左紀子・益谷真・中村真編 顔と心—顔の心理学入門 サイエンス社 Pp. 197–221.
- Matsumoto, D. & Ekman, P. (1989) American–Japanese cultural differences in intensity ratings of facial expressions of emotion. *Motivation and Emotion*, 13, 143–157.
- Matsumoto, D., Takeuchi, S., Andayani, S., Kouznetsova, N., & Krupp, D. (1998) The contribution of individualism vs. collectivism to cross–national differences in display rules. *Asian Journal of Social Psychology*, 1, 147–165.
- 中村真 (1993) 文脈の中の表情 吉川左紀子・益谷真・中村真編 顔と心—顔の心理学入門 サイエンス社 Pp. 248–271.
- 大淵憲一 (1993) 人を傷つける心 攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- Richards, A., French, C. C., Calder, A. J., Webb, B., Fox, R., & Young, A. W. (2002) Anxiety–related bias in the classification of emotionally ambiguous facial expressions. *Emotion*, 2, 273–287.
- Saarni, C. (1979) Children’s understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, 15, 424–429.
- Saarni, C. (1984) An observational study of children’s attempts to monitor their expressive behavior. *Child Development*, 55, 1504–1513.
- 清水秀美・今栄国晴 (2001) S T A I 日本語版 堀洋道・松井豊編 心理測定尺度集Ⅲ サイエンス社 Pp. 183–187.
- 住田勝美・林勝造・一谷彊 (1987) 日本版ローゼンツァイクP–Fスタディ解説 三京房
- William, D. S., Killgore, D. S., & Yurgelun–Todd, D. A. (2005) Social anxiety predicts amygdala activation in adolescents viewing fearful faces. *NeuroReport*, 16, 1671–1675.
- 山岸俊男 (1990) 社会的ジレンマのしくみ 「自分1人ぐらいの心理」の招くもの サイエンス社